

# 初対面の雑談相手に向けられる 日本語学習者の否定表現

—日本語母語話者との比較から

中野 陽

## ◆要旨

本稿では中・上級の日本語学習者が初対面の雑談相手の発話を否定する際、相手を不快にしないよう、どのような調整を行っているか母語話者のものと比較した。その結果、学習者は、相手を不快にしないよう一定の配慮は示しているが、その示し方は母語話者とは異なり、必要最低限の情報（話し手が正しいと考える情報）の追加のみで済ませることや、「あ」や「え」などのような一部のフィラーや笑い、「多分」「あまり」のような特定の部分否定表現に頼ることが多かった。さらには、応答詞「いいえ」や、相手の発言を直接引用した上で「～ではない」を後接するなど、否定ニュアンスを強化するような形式を母語話者よりも頻繁に使用していた。

## ◆キーワード

初対面の雑談、否定表現、調整行動、緩和、強化

## ◆ABSTRACT

This study comparatively examines how intermediate and advanced Japanese language learners and native Japanese speakers adjust their expressions when negating the utterances of first-time conversation partners to avoid causing feelings of displeasure. The results showed that although the learners had a certain level of consideration toward avoiding feelings of displeasure, the methods of doing so differed from the native speakers. There was a general dependence on only adding the minimum necessary information, using fillers such as “a” and “e”, laughing, and employing partially negative expressions such as “tabun” and “amari”. In addition, the learners used forms that reinforce negative nuances more frequently than the native speakers; these included using the “ie” negative response and adding the “dehanai” copula to the utterance of the conversation partner.

## ◆KEY WORDS

First-time conversations, negative expressions, adjustment behavior, assuagement, reinforcement

The Use of Negative Expressions  
by Japanese Language Learners  
toward First-Time Conversation Partners  
A comparative analysis with native Japanese speakers  
YÔ NAKANO

## 1 研究目的

日本語学習者はある程度習得の進んだ段階であっても、初対面の雑談相手の発話を否定する際に直接的な表現を用いることがある。(1)は学習者と母語話者が大学院進学について雑談をしている場面であるが、母語話者(NSOF01)からアルバイトはするかと問われ、学習者(NNSBF03)は「しません。」と、否定命題のみで発話を終えている。

### (1) 〈話題：大学院進学〉

NSOF01：<笑い>そうだね。働いて、お金を稼ぐ…。あれ、アルバイトとかって、します?。

→NNSBF03：しません。 (『BTSJ』<sup>[注1]</sup>台湾・134<sup>[注2]</sup>)

これに対し、(2)の発話には、否定命題の述べ方を工夫したり、情報を追加したりする調整行動が見うけられる。これは母語話者同士がベトナム旅行について話している場面であるが、母語話者(JSF02)に、また行くのかと問われ、雑談相手の母語話者(JBF02)は「行かないです」という否定命題に、終助詞「ね」や、「ちょっとお金なくてー」と、あらたな情報(理由)の追加をしている。

### (2) 〈話題：ベトナム旅行〉

JSF02：えーでも、え、じゃあまた行くんですか?、今年夏とか。

→JBF02：やー行かないですね、ちょっとお金なくてー。  
(『BTSJ』母語話者・193)

(1)のような発話は文法的にはまったく問題ないが、段階的にお互いのことを理解していくプロセスとも言える初対面の雑談で用いると、聞き手の体面を傷つけたり、聞き手に対して非難や突き放しといった非友好的な態度を取っていると受け取られたりする可能性がある。そこで、本研究では初対面の雑談相手に向けられる学習者の否定表現を母語話者のものと比較し、表現が直接的に

なることを避けるための調整行動をどの程度行っているか、また、行う場合にはどのように行っているのかを形式と内容の両方から明らかにしたい。

## 2 先行研究

否定発話に関連する研究には、否定応答詞「いいえ」の、初級日本語教材での扱われ方と日本語母語話者の自然会話における使用のずれを指摘した小早川(2006)があるものの、文・談話レベルを対象としたものとなると「否定表現」よりも「不同意」という術語を使用した研究が中心になる(末田2000, 木山2005, 金2015, 楊2015など)。しかし、それらは「不同意」の定義や分析対象とする領域がそれぞれに異なる。

末田(2000)は、「不同意」自体の述べ方ではなく、その後の発話連鎖に焦点をあて、そこに出現するストラテジー(不同意の態度表明を行った側、受けた側双方のもの)を分析・考察したものである。木山(2005)は、日本語母語話者の雑談場面に現れた「不同意」発話を実質的・儀礼的、直接的・間接的に分類し、社会的距離による出現頻度を比較した。その結果、初対面の雑談では友人同士の場合に比べ、実質的不同意を行う割合は低くなり、また、その実質的不同意は意見として述べる不同意よりも事実として述べる不同意が多かったと報告している。そしてこれらの結果を踏まえ、「会話相手との社会的距離に応じた社会的配慮が必要であることを学習者に指導することが有効であろう」と提言している。しかし、その「社会的配慮」をどのようにすべきなのか情報を提供しないと、会話教育としては十分ではなく、社会的距離のある相手に「事実として述べる」という不同意をする頻度が高くなるのであれば、その際の具体的な配慮の示し方についても研究が必要となる。

金(2015)、楊(2015)は、木山(2005)の分類に従えば「意見として述べる不同意」を行う際の「社会的配慮」に関する研究に該当するため、日本語学習者の、「事実として述べる」否定発話に出現するストラテジーがどのようなかについては知ることはできない。

以上、これまでの研究の成果と課題を踏まえ、本研究では初対面の雑談場面における学習者の否定発話、特に「事実として述べる」否定発話を談話レベル

で観察し、そこにあらわれる調整行動がどのようなものであるか、表現形式、表現内容両方から明らかにすることを目的とする。

### 3 分析データと調査方法

#### 3.1 分析データ

本研究では、『BTSJによる日本語話し言葉コーパス2011年度版』から、初対面の接触場面21会話、日本語母語場面34会話を対象とした。会話参加者は日本語能力が中上級とされる学習者15名（台湾出身6名、韓国出身9名）<sup>[註3]</sup>、母語話者21名、会話時間は平均14分強であった。

初対面会話のデータのみを対象とした理由は、まず、初対面のように、相手に関する情報を持っていない（あるいはわずかである）状況では、親しい相手と話すとき以上に否定表現に配慮が求められ、調整行動がより多く出現すると考えるからである。したがって、本研究では初対面の雑談データが、学習者と母語話者の否定表現を比較する上で適したデータであると判断した。

#### 3.2 調査方法

まず本研究では、以下の（ア）（イ）のいずれかに該当する発話がある箇所を「否定場面」として認定した。

（ア）聞き手からの情報要求に対し、否定の応答をしている箇所

（イ）聞き手の認識が誤りであると指摘している箇所

ただし、次の（ウ）（エ）については対象外とした。

（ウ）ある事柄に対する評価や見解に対する否定

例：「やっぱ新聞は読んどかないと」

「いや、ネットニュースで十分じゃないかな」

（エ）褒めや謙遜、謝罪などに対する儀礼的な否定

例：「新聞のことばかり話しちゃってすみません」

「いえいえ、全然構いませんよ」

（ウ）（エ）を対象外とする理由は、まず、（ウ）は「反論」とも言えるものだが、反論の際に聞き手の不快感を和らげるために用いられる調整行動は、個人的かつ単純な情報について認識の不一致を示す際のものとは異なることが予想されるためであり<sup>[註4]</sup>、（エ）については、強く否定することがかえって聞き手の体面を保ち、友好的な態度と受け取れる場合もあるためである。

次に、本研究では金（2015）で使われていた「表現形式」と「表現内容」という2つのカテゴリから着想を得て、調整行動を「表現形式による調整行動」と「表現内容による調整行動」の2種類にわけ、「表現形式による調整行動」とは、発話を緩和したり、聞き手との連帯感を示したりする表現効果のある形式を用いること、「表現内容による調整行動」は発話内容自体を間接的なものにし、あらたな情報を加えたりすることとする。表1は表現形式による調整行動、表2は表現内容による調整行動の各項目である<sup>[註5]</sup>。

表1 表現形式による調整行動

項目	例
a. フィラー	「あ」「え」「あの」「ええと」「うーん」 <sup>[註6]</sup>
b. 共話 ・ 反復型	A: 今購読しているのって朝日新聞……? B: <u>朝日新聞じゃなくて</u> 、毎日新聞です。
・ 継続型	A: 今購読しているのって朝日新聞……? B: <u>じゃなくて</u> 、毎日新聞です。
c. 部分否定	「あまり…ない」「…というほどでもない」
d. 推量のモダリティ表現	「…と思う」「…かもしれない」
e. 意外感を表す副詞 (聞き手の予測に寄り添う)	「実は」「かえって」「意外と」
f. 「の(だ)」文	「新聞は読まないんです」
g. 接続助詞「けど」「て」「ので」 の終助詞的用法	「新聞は読まないんですけど」 「新聞は読んでなくて」「新聞は読んでない <u>ので</u> 」
h. 終助詞「ね」「よね」	「新聞は読んでないんです(よ)ね」
i. 否定命題と同義の肯定形式で 言い換える	A: 新聞って毎日読むのは無理でしょ? B: いや、 <u>大丈夫ですよ</u> 。(←無理じゃありません)
j. 笑い	—

表2 表現内容による調整行動

項目	例
k. 聞き手の推測を否定するだけでなく、話し手が正しいと考える情報を提供する	A: この記事って読売新聞に載ってたんですか。 × B: いえ。 ○ B: いえ、朝日新聞です。
l. 否定の根拠を示す	A: 新聞読みますか。 B: いや、時間ないんで。
m. 具体例や詳細説明を加える	A: 新聞読みますか。 B: いや、読んでないですね。もう3年ぐらい。
n. 注釈を加える	A: 新聞読みますか。 B: いや、読んでないですね。って言ってもネットでニュースはチェックしてますけどね。
o. 否定命題に関する感想や意見を述べる	A: 新聞読みますか。 B: いや、読んでないですね。お恥ずかしいですが。
p. 否定命題に言及する前提となる知識を問う	A: 新聞読みますか。 B: いや、あの、「グノシー」ってご存じですか？ ニュースはそれでチェックしてます。
q. 前置きをする	A: 新聞読みますか。 B: 個人的には、ネットで読むのが好きです。
r. 対比関係にある肯定命題を持ち出す	A: 新聞読みますか。 B: いや、ネットの記事は読んでるんですけど。
s. 迷いを示す	A: あれって朝日新聞の記事ですよね？ B: どうだったかなー。読売新聞のような気がする。

なお、表現形式による調整行動の各項目のうち、フィラーは山根 (2002) の「対人関係に関わる機能」、終助詞「ね」は神尾 (1990) の「任意要素としての「ね」、宇佐美 (1999) の「発話を緩和する機能」、終助詞「よね」は伊豆原 (2003) の「聞き手との間に共通認識領域を作り出すもの」、「の(だ)」文は野田 (1997) の「応答文におけるムードの「のだ」などの記述、接続助詞の終助詞の用法は白川 (2009) の「聞き手に対して柔らかくもちかける表現効果」、楠本 (2015) の「(中途終了型発話文である)ノデ」文は、聞き手の認識改変を求める「ケド」文よりも談話効果として待制的に高められたものとなる」などの記述を参照した。また、j. の笑いは非言語ではあるが、「フェイスを脅かさないことを示す回避儀礼に関わる非同意の笑い」(笹川2008) のような指摘からも、否定発話を緩和する機能として無視できない行動であるため、便宜的に表現形式の調整行動

に含めることとする。また、分析にあたっては、否定発話が (3) のように「表現内容による調整行動」を伴って連鎖する場合は、聞き手による先行発話にもっとも関連性が高い、中心発話<sup>[註7]</sup> (実線部) に出現するもののみを「表現形式による調整行動」として認定した。これは、各項目が「表現内容による調整行動」に該当する部分 (破線部) で用いられる場合、聞き手の認識を否定すること自体に直接関わる調整とは考えにくいからである (3) の場合、追加情報に現れる「て」や「けど」の終助詞的用法、フィラー「そのー」などがそれにあたる。つまり、このような場合、2Bの「実は」「(の)だ」「よね」を「表現形式による調整行動」、破線で示した2文を「表現内容による調整行動」として認定した。

(3) <話題：新聞を読むか>

- 1A: 新聞は読んでいらっしゃいますか？
- 2B: 実は読んでないんですよ。ほとんど時間がとれなくて。
- 3A: あー。
- 4B: そのー、読みたいとは思っているんですけど。

さらに、否定発話終了の単位は、聞き手が次にターンを取るまでとし、発話を繰り返している場合 (たとえば例 (3) で3Aに「あー、読んでないんですか」のような発話が見られる場合) は、あらたな情報要求への応答であるとも考えられるため、その直前の発話までで区切ることにした。

## 4 調査結果と考察

まず、調整行動の有無を比較した結果を表3に示す。学習者の否定発話には調整行動の全くない事例が17.5%出現したが、母語話者はわずか4%であった。

本研究の研究課題の1つである、「調整行動をどの程度行っているか」の答えとしては、学習者は母語話者よりも否定命題のみでの発話が有意に多いことがわかった。とはいえ、全否定場面のうち、調整行動が82.5%出現したのであれば頻度は高いという解釈も可能である。学習者も否定発話をする際には何らかの調整行動が必要だと感じていることがうかがえる。そこで、もう1つの研

表3 調整行動の出現数比較

調整行動	日本語学習者	日本語母語話者
あり	▽132* (82.5%)	▲194* (96.0%)
なし	▲28* (17.5%)	▽8* (4.0%)
計 (全否定場面)	160 (100%)	202 (100%)

▲有意に多い ▽有意に少ない \* $p<.05$

究課題である、「どのように調整行動を行っているか」に対する答えを確認するため、まず、調整行動が見られた事例について、「表現形式のみ」、「表現内容のみ」、「表現形式+表現内容」を比較した。その結果、学習者は「表現形式+表現内容」と「表現内容のみ」がほぼ同率 (39.4%、38.6%) で、「表現形式のみ」がもっとも少なかった (22.0%)。それに対し母語話者は「表現形式+表現内容」が77.3%と、他の2項目を大きく引き離している。また、「表現形式のみ」、「表現内容のみ」、「表現形式+表現内容」と学習者、母語話者の3×2とでクロス集計表を作成しカイ二乗分布を用いた独立性の検定を行ったところ有意差が確認された ( $\chi^2(2) = 54.807, p<.01, \text{Cramer's } V = 0.410$ )。残差分析の結果、「表現内容のみ」「表現形式+表現内容」のあいだに5%水準で差が見られた (表4)。

表4 種別・調整行動の出現数比較

調整行動の種類	日本語学習者	日本語母語話者
表現形式のみ	29 (22.0%)	27 (13.9%)
表現内容のみ	▲51* (38.6%)	▽17* (8.8%)
表現形式+表現内容	▽52* (39.4%)	▲150* (77.3%)
合計 (調整行動あり)	132 (100%)	194 (100%)

▲有意に多い ▽有意に少ない \* $p<.05$

学習者の否定発話は、表現内容による調整行動のみ伴うことが母語話者よりも有意に多いことがわかったが、それでは具体的にどのような項目が用いられていたのだろうか。学習者の結果を基準に上位3位までを示したのが表5である。母語話者の頻度と比較しやすくするため、出現率 (表現内容の調整行動が1つでも見られた否定発話の合計に対する割合) で示すこととする。

表5 表現内容による調整行動 (出現率における上位3位まで)

	日本語学習者		日本語母語話者	
	出現率	実数	出現率	実数
k. 正しい情報の提供	33.0%	34 (22)	44.3%	74 (8)
l. 否定の根拠	19.4%	20 (4)	32.9%	55 (1)
m. 具体例や詳細説明	17.5%	18 (0)	37.7%	63 (0)

※実数の右にある数字はそれが単独で使われた回数を示す

両グループともに「正しい情報の提供」が1位であったが、学習者は2位が「否定の根拠」、3位が「具体例や詳細説明」であった。それに対し、母語話者は、2位と3位が逆であり、さらに、項目間の出現率に大差は見られなかった。1位の「正しい情報の提供」についても、日本語学習者はそれ単独で用いているケースが22件と、全体の6割以上、日本語母語話者は8件と、全体の1割程度しかなかった。(4)はその一例である。日本語学習者 (NNSM07) には妹がいるという話の続きである。NSM07の推測 (「日本」) の否定にあたり、正しい情報 (「韓国」) も追加しているが、調整はそれのみである。

(4) 〈話題：NNSM07の妹〉

NSM07：えっ、日本で住んでる？。

→NNSM07：いえ、いま韓国。

NSM07：《沈黙4秒》自分は兄弟がいらないから [息を吸い込む音]。

(『BTSJ』韓国・124)

一方、日本語母語話者はこれに何らかの表現形式による調整、あるいは表現内容による調整も組み合わせて行う事例が大半であった。(5)はJBF02が自身のシンガポール旅行についてJSF02が行った推測 (「最近」) の否定にあたり、正しい情報 (「結構前」) を追加し、その発話に終助詞「ね」、また、その事態に対する感想 (「マーライオンが水吹くの見たいんですけどねー」) も添えている。

(5) 〈話題：シンガポール旅行〉

JSF02：最近行ったんですか？。

→JBF02：いや、結構前ですねー。

JSF02：あー。

→JBF02：マーライオンが水吹くの見たいんですけどねー。

JSF02：あ、見てないんですか? =。 (『BTSJ』母語話者・193)

ここでは、否定命題が提示されてからも発話交換が活発に行われ、スムーズな談話展開となっている。これに対し(4)では学習者による追加情報(「韓国」)の直後に4秒沈黙が起き、さらにそのうち母語話者があらたに「自身に兄弟がない」という話を持ち出していることから、この学習者の否定発話(「いえ、いま韓国」)が、母語話者の次発話に影響を与え、「妹の現住所」という話題で会話を継続することを困難にしたことがうかがえる。

次に、「表現形式による調整行動」に関する結果を表6に示す。

表6 表現形式による調整行動(出現率における上位3位まで)

	日本語学習者		日本語母語話者	
	出現率	実数	出現率	実数
a. フィラー	55.6%	45	55.4%	98
j. 笑い	19.8%	16	6.2%	11
c. 部分否定	16.0%	13	11.3%	20
f. 「の(だ)」文	16.0%	13	28.8%	51

表6は表現形式による調整行動のうち出現率の高かったものの上位3位まで(3位は同数であったため、4項目となる)の結果である。出現率で見ると学習者と母語話者でフィラーと部分否定は似通っているが、笑いと「の(だ)」文は順位がほぼ逆であり、学習者が非言語情報である笑いに頼っていることがうかがえる。また、具体的に使われていた形式を確認したところ、まずフィラーは、「あ」や「え」が両者ともに見られたものの、「ええと」と「あの」は母語話者にしか見られなかった。特に「ええと」は母語話者が否定発話の冒頭において7回使用していたのに対し、日本語学習者のデータからは1例も出現がなかった。具体的な使用例は次の(6)のようなものであり、これと類似した否定場面、ある学習者は(7)のようなフィラーを用いていた。

(6) <話題：YM01の学生時代の専攻>

BM01：あでも、情報一のほうに行くんだったら、情報工学かなんかですか?、システムとかか{<}。

→YM01：<えっと>{>}、まったく関係ありません<笑い>。

(『BTSJ』母語話者・178)

(7) <話題：NNSBF04の父親の出身>

NSSF01：あー、え、でもお父さんは台湾でしょう?。

→NNSBF04：え、いいえ、わた、私のえ、父は、四川人[中国語で]。

(『BTSJ』台湾・178)

高木・森田(2015)は、質問に対する反応の開始部分に現れる「ええと」について、日本語話者はまずは「ええと」を産出することにより、「今自分に宛てられたその質問に回答するには、ある難しさを伴うが、それでも回答の産出に最大限に努める」という主張を受け手(質問者)に示すことができるとしている。今回観察したデータにおいて、学習者は否定場面以外の環境では(8)のように「ええと」を使用していたが、否定場面ではまったく見られなかった。

(8) <話題：夜間授業の時間と曜日>

NSSF01：何時から?、夜間は。

→NNSBF02：えと、6時25分から、10時5分まで、《沈黙2秒》月曜から、あの一、金曜まで。

(『BTSJ』台湾・133)

このことから、学習者は、高木・森田(2015)の指摘にあるような「ええと」の働きをあまり認識していないことがうかがえる。

部分否定表現の形式についても、母語話者のデータからは「～というわけではない」「必ずしも～とは言えない」「～というか」といった引用表現を含む形式や、「そうでもない」「～とも違う」のように「は」ではなく「も」を使用する例が5例見られたが、学習者からは1例も見られず、「多分～ない」や「あまり～ない」のような、初級レベルの形式に偏っていた。

さらに、否定ニュアンスを緩和する表現とは逆に、むしろ強化する表現形式

として応答詞の「いいえ」や、相手の発言を直接引用した上で「ではない」を後接する形式（「～じゃない。」「～では／じゃなくて」も含む）の使用が、日本語母語話者に比べて多く使用されていたことがわかった（表7）。

表7 否定ニュアンスを強化する形式の出現数

	日本語学習者	日本語母語話者
応答詞「いいえ」	25	0
直接引用+「～ではない」	15	5

特に顕著であったのは、応答詞「いいえ」の使用である。学習者からは25例出現したが、母語話者のデータからは1例も出現しなかった。小早川（2006）は、初級日本語教科書では「問いに対する否定応答」として「いいえ」の出現が82%を占めていたが、自然会話において「問い」に対する否定応答にはほとんど用いられなかったことを指摘しているが、今回の学習者と母語話者の使用頻度の差は、その指摘を支持するものとなった。

また、「ではない」の使い方にも母語話者と学習者では使用の違いが見られ、学習者は（9）のように相手の発言を直接引用するかたちで用いる事例が15例であったのに対し、母語話者は5例のみで、（10）のような継続型の共話を利用することで直接引用を避ける事例が9例見られた。

（9）〈話題：NNSM04の来日経験〉

NNSM04：1年生の時に来たことがあ<る>{<}[ ↓ ]。

NNSM04：<あ、はい>{>}はい、来たことがあります。

NNSM04：修学旅行か、何かで??。

→NNSM04：修学じゃなくて、親戚が<いて>{<}、 (『BTSJ』韓国・121)

（10）〈話題：JBF03の研究〉

JOF01：あっ、じゃ、あっ、じゃあ日本語教育を。

JBF03：<じゃなくて、全然…、(うん) えと、地域研究の、(うんうんうん) 中国、の方‘ほう’の研究<を>してまして>{<}。

JOF01：<あっ、そうなんですか>{>}=。 (『BTSJ』母語話者・196)

（9）でNNSM04は相手発話の一部をそのまま使用して「修学じゃなくて」と発話しているが、（10）でJBF03は「日本語教育」を使用せず、継続型の共話で連帯感をも示している。母語話者は、相手が直前に用いた表現をそのまま使用するかたちで否定することは、相手の体面を傷つけることになり、否定ニュアンスを強化することにつながることを意識していることがうかがえる。

## 5 まとめと今後の課題

本研究の調査により、次のことがわかった。まず、中・上級の日本語学習者は初対面の雑談相手の発話を否定する際、何らかの調整行動を伴うことが多い。しかし、その調整行動は、最低限の情報（話し手が正しいと考える情報）の追加のみになりがちである。また、否定ニュアンスを緩和する表現形式も十分には理解・運用できておらず、「あ」や「え」など一部のフィラーや笑いに偏っている。さらに、否定ニュアンスを強化するような表現形式（応答詞「いいえ」や相手の発言を直接引用した上で「～ではない」を後接するなど）も頻繁に使うことがわかった。これらのことから、日本語学習者は、初対面の相手と雑談をする際、何らかの配慮は示す必要があるという意識はありながらも、具体的にどのような調整行動によって示せばよいのか、また各表現形式が持つ緩和・強化のニュアンスについて十分に認識ができていないことが示唆された。

ただし、本研究には課題も残っている。まず、今回の日本語学習者の発話データは台湾と韓国の学習者のみであったため、他の言語を母語とする学習者の発話データの観察が求められる。また、本研究で調整行動の下位項目として挙げたものは完全に網羅的であるとは言えない。表情のような非言語情報や、声のトーンのようなパラ言語情報も含め、より詳細に観察をする必要がある。さらに、日本語学習者の直接的な、または調整行動が十分ではない否定発話その後の発話連鎖、相互作用にどのような影響を与えるのかも探る必要がある。今後、これらの課題についても調査を行って知見を深めたい。

〈大阪府立大学大学院生〉

## 謝辞

本稿は2016年度日本語教育学会春季大会（目白大学、2016年5月22日）において発表した内容を加筆・修正したものです。会場でコメントをくださった帝塚山大学の森篤嗣先生をはじめ多くの皆様へ感謝申し上げます。本稿の執筆にあたっては、指導教員である張麟声先生、国立国語研究所の野田尚史先生からご指導いただき、神戸女学院大学の建石始先生からもご助言をいただきました。また、査読者の先生からも貴重なご指摘をいただきました。皆様に心より感謝申し上げます。

## 注

- [注1] …… 宇佐美まゆみ監修『BTSJによる日本語話し言葉コーパス2011年度版』。会話データに付した下線やフォントの変更は本稿筆者によるものであるが、それ以外の部分には手を加えずに引用している。
- [注2] …… 『BTSJ』からの引用である場合、ここで取り上げられている発話者の情報（学習者の場合は出身国）と、当データベースにおける会話番号を記しておく。
- [注3] …… 『BTSJ』の会話参加者データによると初対面の接触場面会話に参加している日本語学習者は韓国出身が中級レベル、台湾出身が上級レベルとなっている。
- [注4] …… 例えば金（2015）における「語尾は同意を誘う問いかけにする」「不同意表明の前に同意の意見を述べる」といった調整行動は、個人的かつ単純な情報について認識の不一致を示す際に用いられることはあまりないと思われる。
- [注5] …… 表内の例文はすべて作例である。
- [注6] …… ここでは代表形のみ示し、「ああ」「うーん」「あー」「えっと」なども、それぞれのバリエーションとして数に含める。
- [注7] …… 佐久間（2000）で用いられている、文章における中心文に対応する概念。

## 参考文献

- 伊豆原英子（2003）「終助詞「よ」「よね」「ね」再考」『愛知学院大学教養部紀要』51(2), pp.1-15. 愛知学院大学
- 宇佐美まゆみ（1999）「「ね」のコミュニケーション機能とディスコース・ポライトネス」『女性のことば・職場編』pp.241-267. ひつじ書房
- 神尾昭雄（1990）『情報のなわ張り理論』大修館書店
- 木山幸子（2005）「日本語の雑談における不同意の様相—会話教育への示唆」『言語情報学研究報告』6, pp.165-182. 東京外国語大学
- 金桂英（2015）「話し合いでの「不同意コミュニケーション」における「配慮」の様相—接触場面での物事を決める話し合いの分析から」『待遇コミュニケーション研究』12, pp.35-51. 待遇コミュニケーション学会

- 楠本徹也（2015）「中途終了型発話文「けど」「ので」の要求・断り行為場面における待遇的談話機能」『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』41, pp.47-60. 東京外国語大学留学生日本語教育センター
- 小早川麻衣子（2006）「初級日本語教科書に現れた応答詞—「いいえ」系応答詞の提示にみる問題点」『日本語教育』130, pp.110-119. 日本語教育学会
- 佐久間まゆみ（2000）「文章・談話における「段」の構造と機能」『早稲田大学日本語教育センター紀要』13, pp.67-84. 早稲田大学
- 笹川洋子（2008）「異文化コミュニケーションに現れる笑いのモダリティ調節について」『神戸親和女子大学言語文化研究』2, pp.29-52. 神戸親和女子大学
- 白川博之（2009）『「言いさし文」の研究』くろしお出版
- 末田美香子（2000）「初対面場面における不同意表明と調整のストラテジー」『日本語教育論集』16, pp.23-46. 国立国語研究所日本語教育センター
- 高木智世・森田笑（2015）「「ええと」によって開始される応答」『社会言語科学』18(1), pp.93-110. 社会言語科学会
- 野田春美（1997）『「の（だ）」の機能』くろしお出版
- 山根智恵（2002）『日本語の談話におけるフィルター』くろしお出版
- 楊虹（2015）「話し合いにおける不同意表明発話のモダリティ」『研究年報』46, pp.87-102. 鹿児島県立短期大学

## 資料

- 宇佐美まゆみ（監修）（2011）『BTSJによる日本語話し言葉コーパス（トランスクリプト・音声）2011年度版』

